
世界は耳障りな雨の中に。

暁 京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界は耳障りな雨の中に。

【Zマーク】

N1563A

【作者名】

暁京

【あらすじ】

雨の日、自暴自棄になっていた美雨は、妻のある青年に出会い。

雨の日は大嫌いだ。

だけど、私とあのひとが出会ったのもまた、暑い夏の夕立の中だった。

あのひとは、一年付き合った彼氏に四又をかけられてふられ（しかもそのうち一人は男）た私を、見つけた。電話ボックスから。そこしか隠れる場所がなかつたなんて、馬鹿みたいだけど。

「なあ、十円玉持つてる？…泣いてるの？」

私ときたら髪も体も芯からずぶぬれで、本当に濡れ鼠みたいで。出来る限り小さく体を折りたたんで、下を向いていた。終わる事無く滴り落ちる水滴が、雨で濡れた為なのか泣いていたのか自分でもよくわからなかつた。

幽霊みたいに生氣の失せた私に声をかけたあのひとの度胸と言つか無邪氣さには感嘆してしまう。私なら一眼散に逃げるだろう。

「…百円玉ならあるわ」

ジーンズのポケットに入っていた小銭を突き出すと、あのひとは目を丸くして座り込んだ。私と目線を合わせようとしてくれたのだった。

あのひとはとても背が高くて、瘦せていた。紺のスースイがよく似合つていたけど、歳はせいぜい二十一、二二。大学出たてといった雰囲気で。瞳が怖い位に澄んだ闇を持っていた。

「何言つてんの。九十円も損すんだよ？」

その一言に何でか私は吹き出して。泣きながら、笑つた。そんな私を見てあのひとも笑つた。深い深い雨音に私達の笑い声はとけていつた。

「俺は一矢。^{かずや}一本の矢つて書いてかずや。君は？」

ひとしきり笑つた後、一司は真顔になつて尋ねた。彼は、私の目の端に残つていた涙を不器用にぬぐつてくれた。

その時に、気付いていたのに。彼の左手の薬指。真新しいプラチナの指輪。

「美雨よ。美しい雨でみつ」

すると一矢は電話ボックスの外と、私を見比べてにっこりした。

「綺麗な名前だな。今の天気にふさわしい」

そして一矢が私の事を“みゅう”と愛しそうに呼ぶようになるのに時間はからなかった。

雨の魔力に魅せられて、私達は抱き合った。彼の車の中へ、崩れるように倒れこんで。

アスファルトから立ち上る湯気。むせかえる程の暑さと、たたきつけるような雨音。真夏の夕方。電話ボックスの前に止められた黒のオデッセイ。フロントガラスには富島で買つたらしい交通安全のお守り。微かに残る女物の香水の香。ここに残る奥さんの気配。車の中で愛し合いながら私は静かに目を閉じた。

私を一番に愛して、なんて言わないから。一番田でも、何でもいいの。ただ、心の片隅に置かせて下さい。

誰でもいい訳じやなかつた。そして、一矢を選んでしまつたのだ。

「止んだよ、雨」

コトが終わつて私は甘い余韻にひたりながら、一矢のかすれた低い声にそつと頭を上げた。

もう何度目の逢引なのか、わからなかつた。

私は高校なんてとつぐに辞めてしまつていたし、両親は私について諦めていた。

彼からの着信音が鳴ると真夜中でも家を飛び出した。

自分でも溺れていたのはわかつていた。だけど辞めるすべを知つている程大人ではなかつた。

転がり落ちるよう、一矢を愛した。愚かな恋に、身を滅ぼした。

「転勤が決まつたよ」

夏も終わりに近い、やつぱり酷い雨の日だった。

すっかり馴染んだ車の座席で私はカーティガンを羽織り、一矢の顔を見上げた。

そして、ああ、もう終わりなのだと思った。

彼の目は、あの暗い色の瞳は、もはや未来を見ていたから。酷い雨音も、耳に入つてはいないようだつたから。私の声も、顔も。すべて。

行き先はシンガポールで、星が“輝く”のではなく、“またたく”という。

「みゅうとも見たかったな。俺達が会つた日つて雨が多かつたもんな」

星なんて一つもいらない。私が欲しいのはどしゃぶりの雨の中、電話ボックスの前で待ち合わせる一矢だ。なのにどうして伝わらないんだろう。

あのひとは今頃、“またたく”星を妻と一緒に愛でているのだ。

今日は酷い雨。けれど一矢から電話がかかつて来る事はもつないのだ。

雨の日は、大嫌い。だけど愛しいのもまた、雨の日。

(後書き)

親友、未優に。

彼女の実話を元に、許可をもらつて描かせてもらいました。恋愛は狂気に満ちていて、はまると脱け出せなくなるといつ様子が描きたかったのですが（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1563a/>

世界は耳障りな雨の中に。

2010年11月11日19時19分発行